

# たくさんの出会いがありました

人権週間  
イベント・人権作品展

# ま ず ず な

## 第8号

### 2015年4月

<発行>  
泉南市人権啓発  
推進協議会

去る12月3日(水)も、「毎年楽しみにして

7日(日)の5日間、イオンモールりんくう泉南店で『人権作品展』が開催されました。毎年12月の人権週間にちなんで開催しているもので、今年度は曜日の関係で例年より短い日程となりましたが、5日間で延べ1337人の来場をいただきました。

今回新たに、『りんくう翔南高校』と『泉南支援学校』にも参加していただき、市内の幼稚園・保育所・小中学校や識字教室の生徒さんと、一般の方から絵画・習字・写真・標語など、179点もの作品が集まり、開催前日に職員ほか関係者総出で、設営・作品展示しました。

来場いただいた方から



保育所の子どもたちが見に来てくれました

「毎年楽しみにしていても、写真や標語もあつて退屈しない。」「孫の幼稚園の作品が展示されていると聞き、下見に来たが想像以上に上手でびっくりした。明日、もう一度孫と一緒に来て、ほめてあげたい。」

6日の土曜日は午後から、大学のOGグループ「パッサカリア」によるマンドリン演奏会も行われました。演奏会の後半、誰もが知っている曲「浜辺の歌」の演奏になり、会場の参加者が口ずさむ声とマンドリンの演奏が一体になり、終了後には「アンコール！」が出るほどの盛り上がりでした。これからもさまざまな活動を通じて、人権の輪を広げていきたいと思えます。



パッサカリアさんによるマンドリンコンサート

(西信達校区 柿本繁雄)

人権週間  
「市民の集い」

12月7日の日曜日は、文化ホールにおいて、ドキュメンタリー映画『ある精肉店のはなし』の上映と、出演者の北出昭さん・監督の瀬瀬(はなぶさ)あやさんにお話していただきました。

当日は400人を超す大勢の方々にご参加いただきました。今回は、くすのき幼稚園でも牛の取り組みをしていただいたおかげで、いつもの集い以上に幅広い年代の方々にご参加いただきました。小さい子どもさんと一緒に参加してくれた國松さんに感想をいただきました。

今回、このすてきな時間をもてたのも、※「すまいるママ」の皆様にも子どもを一時保育していただいたおかげだと思えます。子どもも風船で遊んだりお友だちとおままごとをして楽しかったと喜んでいました。ありがとうございました。(國松 真千子)

映画「ある精肉店のはなし」を鑑賞して

精肉店の人情味あふれる日常をとらえ、命をいただくことをしっかりと考えさせてくれる素晴らしい映画で、泣いたり笑ったり



※すまいるママとは、泉南市内を拠点として活動する一時保育ボランティアサークル

# 戦後70年 座談会 —前編—

## 語り継ごう 未来の平和を願って…

多くの尊い命が犠牲になった太平洋戦争の終結から、今年は70年の節目を迎えます。戦争を経験した人が少なくなり、記憶が風化されるなか、泉南市人権啓発推進協議会では、戦争経験のある委員のみなさんと当時をふりかえり、語り合いました。(今回の8号では前編、次号9号では後編を掲載します。)



柿本さん(昭和35年生、現在55歳)

【真鍋】私の母なんかは波乱万丈の人生だったと思います。私は東京のど真ん中(赤坂)で生まれ、最初

【司会 柿本】私は、戦争を全く知りません。もちろん生まれた時の記憶はなく、おぼろげに覚えているのは幼稚園、小学校低学年ごろです。その時点で戦後20年。私の記憶では、学年が上がっていくにつれて、日本の国そのものがオリンピック・万博など高度経済成長により、ものすごい勢いがあった。戦争については、学校でいろんなことを習ったり、節目の時にテレビで見たり、法事などで、おじさんやおばさんが話してくれたのが身近な話だった。家では両親とは話はしなかったですね。今日の貴重な体験は次の世代へ伝えたいと思っています。

の戦争体験だったのが、1941年に戦争が始まり、父の実家のある岐阜へ強制疎開をしたことでした。次の強烈な体験は、すでに満州に単身赴任していた父の元へ、母は私達三人の娘を連れて無謀にも海を渡ったということでした。ですから母は苦労話は全く人には話したがらなかったですね。その当時私はまだ6才位だったと思います。

【南】満州に渡ったのは？

【真鍋】昭和18年に渡り2年ぐらいしか満州にいなかったです。終戦になり日本に帰りました。戦後父はシベリアに抑留され、私たちは母の言うとおりに動いていたけど、母は何でも自分で判断しないといけなかったから、大変苦労したと思います。なので、母は戦争の話はあまり話したがらなかったですね。

【小栗】終戦の時は国民学校の4年生だったが、ほとんど授業受けてない。和歌山の田舎やけど、軍港のある舞鶴へ爆撃に行くB29が紀伊水道の上空を通り過ぎるので、午後になるとほぼ毎日のように空襲警



真鍋さん(昭和12年生。終戦は満州で迎え、昭和21年、8歳の時に日本へ戻ってくる。)

報が発令される。すると早く家に帰れとなるのだ。大阪の兵隊が兵舎を焼かれて、疎開してきてね。小さな学校の校舎の半分を兵舎として使っていたので、残った教室で、午前の部と午後の部に分けて、一週間交替で二部授業をした。午前中の時はよいのだが、午後の部になると、空襲警報発令で授業ができないのだ。終戦の一週間位前だったと思うが、紀の川へ泳ぎに行っていたら、空襲警報のサイレンが鳴ったので、急いで家に帰る途中、グオンという爆音と共に、急降下してきたグラマンに狙い撃ちされてねー。もうそれは恐かった。田んぼのあぜ道に伏せて、怖いけど上を見たらパイロットは真っ赤な顔をした赤鬼のような大きなやつだったわ。同時にパチパチと水田に水柱があがって、もう死



んだと思ったよ。

【司会】操縦士の顔まで見えたんですか？

【小栗】いやあ、見えたよ。顔が見える近いところまで降りてくるんよ。

【東】B29は、高空から一トン爆弾、グラマンは機銃掃射等低空からの攻撃やった。

【司会】ほう、B29の爆撃機と艦載機のグラマンは高度が違うんですね。

【小栗】B29は爆撃機で、高度は1万m位の所を飛行しているが、夜間空襲は爆弾や焼夷弾の命中精度を上げるために、1千〜2千mまで降下してくるのだ。グラマンは戦闘機で、通常は4千m位の高度で飛行しているが、地上銃撃する場合は20〜30mまで降下したらしい。

【南】私の母親も田んぼでねらわれたって言ってましたね。

【司会】実際にあつたりはしてないんですか？

【小栗】みんなバラバラに逃げたけど誰もあたらな

かった。馬鹿げた話やけど、疎開に来た兵隊が、毎日紀の川の河原で竹やり練習、材木を持ってきて戦車の実物大の模型を作り、草を抜いてきて偽装戦車を作った。アメリカ軍がそれをめがけて打ってくるんや。燃えた所で木やけど、それで弾が無駄になるんや。



小栗さん（昭和11年生。和歌山で生まれ育ち終戦当時は国民学校4年生。）

【司会】それは、疎開してきた兵隊さんたちが考えたんですか。

【小栗】そうや、ちょっとでも弾を消耗させようとして考えたんや。

【司会】国の力の差をまざまざと見せつけられますね。その程度の作戦を考えてたんですね。

【小栗】授業で連れていかれたんやけど、小学6年生と高等科の生徒は石を投げる練習をさせられた。そんなあほなことやってたんや、そら負けるわな。

【真鍋】だいたい日本の地図を見たらわかると思うけど、周りは全部海で、アメリカやソ連の大陸が大きくあつて、その横でちよつと細い日本があるだけで他の国全部を相手に戦争しても勝てるはずがない。

【東】和歌山は艦砲射撃がきつかったんちゃうの？

【小栗】いや、僕の住んでるところまでは来なかつたよ。

【司会】艦砲射撃って？

【南】艦（船）から弾を打つ、沖縄でもあつた。遠いところから打つ作戦や。

【真鍋】戦争中に飛行機を積んだ航空母艦が、終戦後は私たちが満州から帰ってくるよきの引き上げ船になったのです。私達も航空母艦に乗って帰って来たんです。

【東】僕の生まれは、大阪市内の京橋駅近くの都島です。大阪城東北部にあつた陸軍造兵工廠を狙つたB29大編隊、グラマンによる大空襲が敗戦の年の6月7日にあり、天王寺から尼崎まで広大な被害を



石原さん（昭和13年、鹿児島で生まれる。国民学校に上がるまで泉南に住む。終戦時は高石国民学校1年生。）

与えた。3歳で詳しいが記憶は無いが、焼き出され、父母と大八車に家具等を積んで東淀川区へ逃げる時、長柄橋も攻撃され渡れず、赤川鉄橋まで遠回りした事は、ハッキリ覚えてる。

【真鍋】3月10日の東京大空襲で、私の実の姉が2人亡くなりました。手がかかりも何にも全くありませんでした。

【石原】僕が国民学校に入った年に終戦。学校では配属の兵隊から、避難訓練のため防空頭巾をかぶり、運動場にうつ伏せにさせられた。家の近くの空き地に穴を掘り、兵隊が銃を持って入っていた。その時一番経験したのが堺の大空襲。

浜寺から夜に、焼夷弾がバラバラ滝のように落ちていくのが見えるんです。B29がとんできて、どこへ行くんかなーって思った

ら、堺の空襲でした。聞いた話は淡路島から高射砲が打たれ、夜に警戒警報が発令されると、電気傘に黒い布をかぶせ外へ光がもれないようにした。僕と同級生は、焼夷弾の流れ弾にあたって家が全焼したという記憶が残っています。あと、食べ物は何にもなかつた。家の隣の空地でお芋さんを植え、味噌汁の中に麦を入れて、お芋さんの葉っぱも食べた経験があります。

【小栗】大阪から集団学童疎開で同級生が来ていた。親と離れてかわいそうだから、家に遊びにおいでと母親が言ったら、大勢で遊びに来ていたよ。おとなになつてから聞いた話やけど、滋賀県の方に疎開した子どもたちは終戦で親が迎えに来たが、いつまで待っても迎えにこない子どもがいた。その子の親が空襲で死んでしまったらしい。それはかわいそうな話しやつた。

【東】戦争中は、市場も近くにあつて食べ物結構あつたように思う。けど、戦後はだんだん無くなつていつて、服とか物々交換して食べ物を入れた。祖母が丹波育ちで米、卵等



清水さん (昭和 11 年、岡山県で生まれ、高校卒業後大阪へ移る。終戦時は国民学校 4 年生。)

を貰いに行けたので少しは楽だったが、近所の方は大変だったようだ。

【清水】国民学校 4 年生で終戦を迎えたが、戦争中、国がどういいう教育をしていたかを知るための資料として、当時の通知表を持ってきた。その中に「教育

勅語 (きょういくちよくご) が印刷されていた。(別掲参照)

この「教育勅語」は国民の思想を統一するために利用されたものと思われま。卒業式、新年の式、などの式典で、白い手袋をした校長先生がうやうやしく巻物を広げ、全児童に聞かせていた。さらに、意味もよくわからないのに「教育勅語」を覚えさせられた。

今の時代ではとうてい考えられない。天皇の命によりすべての国民が心一つにして戦おうというところに大きな意義があったのだと思う。

### 教育ニ關スル勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ徳兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス

〈本文中略〉

朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ。

明治二十三年十月三十日

御名 御璽

※現代語訳  
私が思うには、我が皇室の先祖が国を始めたのは、はるか遠い昔のことで、代々築かれてきた徳は深く厚いものでした。我が国民は忠義と孝行を尽くし、全国民が心一つにして、代々にわたって立派な行いをしてきたことは、わが国のすぐれたところであり、教育の根源もまたそこにあります。

〈本文中略〉

私はあなた方国民と共にこの教えを胸中に銘記して守り、皆一致して立派な行いを

明治二十三年十月三十日

天皇の署名と印

【東】教壇の上に御真影があり、上がる時に校長が一礼していただと聞きました。



東さん (昭和 17 年生、大阪市で生まれ、終戦当時 3 歳。)

【清水】学校生活で心に残っているのは、毎朝、全校児童を集めて、係の先生が戦果を語るのを聴くことだった。内容はいつも敵の軍艦や航空母艦を撃沈したことであつた。その時は子どもながらに信じていました。

【東】父の思い出は、私が 3 歳の時、終戦になったのだが、その時に父は亡くなった。戦地に行く前に父は私に、ゲートル (ズボンのすそを抑えて、足首から膝までを覆うもの) の巻き方を教えてくれて、戦地へ行ったのです。



ゲートル

## ひととき

きずな新聞第 7 号で掲載しました、～「はるかのみまわり」西信達でも咲いたよ！～の、はるかさんの姉、加藤いつかさんの記事が 1 月 17 日にむけてありました。当時 15 歳で中学 3 年生だった今は 35 歳になられ、NPO 法人阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」の理事として「はるかのみまわり」を通して防災、減災の大切さや、未だに心の傷が癒えない人々が多く居られる現状を懸命に伝える活動に取り組まれておられます。

私たちも去年、西信達小・中学校で咲かせた「はるかのみまわり」を、今夏は泉南市全体の小・中学校に咲かせ繋ごうと語り合っています。

(西信達校区 東佑吉)



【真鍋】お父さんは戦場で亡くなったんですか。

【東】はい、軍属として学徒兵たちと共に羅津丸という船で満州に向かう日本海羅津で、魚雷攻撃を受け、一瞬に撃沈されたりしい。

【清水】先ほども話にあつたのですが、「こんなんで日本は勝てるんかな」と同じようなことで、学校から帰ると山へ行き、松根油を集めるため、松の根を掘る手伝いをしました。

【南】私の記憶では、松の幹に傷をつけて松脂をとりました。

【司会】その油は何に使つたのですか。せいぜいろうそく代わりにしかならなかったのでは。とても燃料にはなりませんよ。そんなことまでして飛行機をとばす日本と、石油を使っている国とが真つ向から戦争しても勝てることないわね。

【清水】その他、不足していたものとしては金属だった。だから、家の中にある金属を供出させられた。不要ななべ、火鉢など。橋の欄干の擬宝珠までなくなっているのを見た。

【真鍋】家の中にある金属類も出しましたよ。



【清水】学生服のボタンも金属でしたよね。

【小栗】そうそう、学生服のボタンが瀬戸物のボタンに変わりました。

【南】アメリカはわかってるんやけど、「日本にまだ金属はたくさんあるぞ」ということを示すために、木造の飛行機を学校のグラウンドや飛行場にズラーっとならべてた。

【司会】飛ばへん飛行機をならべてたんですか…。どこまでホンマかわからへんけど。

【真鍋】日本人は魂とかを大事にしていたから、気持ちで勝てると思ったんでしょうけど、やっぱり戦争は気持ちだけでは勝たれへんかったんですね…。

【石原】兵隊さんが死ぬとき、「天皇陛下万歳」じゃなかった。「お母さくん、お父さくん」って言ったらしいね。

【小栗】学校へ行くのに集団登校。「歩調をとれ」って言われたな。

【真鍋】「みんな並んでちやんとしなさい」っていう

意味やね。

【小栗】みんなで歌う歌は、兵隊さんを賛美する歌が多かった。♪「肩を並べて兄さんと、今日も学校へ行くのは、兵隊さんのおかげです」その時は子どももやったけど、おとなになつて、替え歌で「今日も酒が飲めるのは、〇〇さんのおかげです」って歌ったよな。

【南】40年代後半にカラオケが始まったけど、それまでは民謡や軍歌、戦歌が宴会の席でも歌われた。うちの会社の大先輩も特攻部隊に入つて、当時、鹿児島県の知覧へ配属され、どんどん特攻隊が飛んでいったが、終戦の時、自分の手前の人まで飛んで行つたらしい。その大先輩が、「戦争を知らないものが軍歌を絶対に歌うな。お前らは戦争なんて知らん

やる。」と泣いて話してくれた記憶がある。軍隊へ行ってた人、爆撃にあつた人、それは経験がないと、話だけではわからないと思いますよ。

【小栗】僕は爆撃の経験があるけど、そりゃ絶対戦争はあかんと思う。食べるものはないわ、いつもお腹はすいてるわ、爆撃はバーって撃たれるわ、無茶苦茶やつたな。

【清水】その反対の意味で流行ったのが「リンゴの唄」です。歌っていた並木路子さんは、レコーディングの時に、「もっと明るく歌え。」と言われていたが、両親を戦争で亡くした環境の中で、苦勞してあの歌を歌っていたというエピソードがあります。

【小栗】終戦後、「リンゴの唄」は爆発的にヒットしたね。

【清水】みんなあの曲に勇氣をもらったと思いますよ。子どもでもすぐに覚えたしね。

【真鍋】まあ、知らない人はなかったでしょうね。

【南】明るい歌では「青い

山脈」「憧れのハワイ航路」が流行りましたね。

【東】その頃から社会も変わってきたよね。

【南】昭和20年の話に戻るけど、3月10日が東京大空襲、3月13日が大阪大空襲、3月17日が神戸の大空襲。神戸の大空襲は、東京、大阪と比べて小さかったけど、焼け出された神戸市の面積の比率は一番大きかった。その時の燃えた灰は、泉南にも飛んできて、家の屋根瓦も灰で覆われたようでしたよ。

【真鍋】うちのおじいちゃん、おばあちゃんもそんな話してましたわ。神戸が燃えたときは、ものすごかつた。うちは樽井なので、神戸がよく見えた。こんなこと言ったらあれやけどきれいかった、って。

【小栗】和歌山が空襲の時、焼夷弾が赤い糸を引いたように落ちてきて、途中でパーッと広がるんや。まるで打ち上げ花火を見ているようやったなあー。

（続きは次号（10月発行予定）へ）



南さん（昭和12年西宮市で生まれる。昭和18年に父の実家がある泉南へ移る。国民学校2年生で終戦。）

### 非核平和都市宣言30周年記念事業 2015 非核平和の集い

日時:8月23日(日)  
開場…午後1時  
開演…午後1時30分

場所:泉南市立文化ホール

内容:映画「望郷の鐘  
～満蒙開拓団の落日」上映



みずからも満州で過酷な体験をしながら、生涯を残り留孤児たちの肉親がしがきで支えた山本慈昭。その生涯をたどった感動の物語。

# 校区の集い

市内4校の小学校で、もと引きこもり青年 JERRY BEANS (ジェリービーンズ)さん&手話シンガー-yokkoさんによるバンド演奏を行いました。

## 講演終了後、ジェリービーンズさんからメッセージをいただきました。

みんなの元気に圧倒されて、みんなの笑顔に癒されました。

そして、雄介の過去の話に涙を流している子が沢山いて、素直に聞いてくれたことを嬉しく思いました。

みんなそれぞれに抱えてるものがあるって、立っているのがやっとな子もいるでしょう。

心があるから苦しいこともあるって、自分の存在や未来を嫌う日だってあるかもしれない。だけど、こうしてみんなを見てるとそれだけでこの世界の素晴らしさを感じるんです。希望を感じるんです。

今日みんなで笑いあったように、みんなと一緒に未来を信じたい。ありがとう。みんなに逢えて本当に良かった。心からありがとう。

今年度、泉南市での講演は今日で4回目になります。砂川、一丘、雄信、そして今日の新家小学校。泉南市人権推進啓発協議会のみなさんが計画してくださいました。

どの学校でもいい思い出ばかりです。またみんなに逢いたい。先になっても歌い続ける限りそんな日が来ると楽しみにしています。

関わってくださった全てのみなさま。心から出逢ってくれてありがとう。

ジェリービーンズ 史朗



## 編集後記

今回の特別企画の“平和座談会”はいかがでしたでしょうか。“平和座談会”については、次号でも後編として掲載を予定しています。今回の記事を読んでいただき、あらためて平和について考え、家族とも話し合っただけであればと思います。

また新聞に関する感想やご意見などありましたら、『きずな』の編集部までお知らせいただければと思います。(企画実行委員会 編集委員)

## 大丈夫！

右手を、交差するように左肩に当てそして右肩に移す。それが「大丈夫」という手話だと教わりました。

「僕たちは不登校だった」そんな3人組のバンド JERRY BEANS と手話歌の Yokko さんのコンサートが10月16日、砂川校区人権啓発推進協議会として開催されました。バンド演奏と手話歌との透き通るようなサウンド

ドが体育館を、児童、先生、保護者、地域の人の心を包み込んでくれました。やがて、静寂の中、不登校だった体験が語られました。不登校に陥ったこと、その苦しみ、自分を責める気持ち、遂に自殺までしようとしたとき、「あんたが元気に生きてくれたら、それで十分や、あんたが何をしたいって、誰がどう言うたってお母さんはあんたの味方やで。」そう言ってお母さんは、泣きながら抱きしめてくれたそうです。そうして

て人生が変わるほど救われた気持ちになったという事です。私はそのお母さんを抱きしめたい気持ちになりました。どれ程トンネルを暗く、長く感じておられたことでしょうか。また、精いっぱいの方でともに登下校する母と子も、それを見守るボランティアも、聴く人皆、感動で心を大きく揺さぶられたようです。そして、改めて感じました。辛い思いをしている子には、周囲に歩調を合わせるこ

とに焦るよりもまず、そのままを受け止め、「あなたのはかけがえのない存在なのだ。」と包み込む大人が絶対に必要であると。やがてその子は安堵感に満たされて、眠らせていた力を掘り起こすことができるから。自尊感情の大切さがよく言われますが、彼らはそれを強く訴えてくれたのです。好きな音楽で、更に多くの人に伝えて元気を与えてもらいたい、と、

JERRY BEANS 頑張れ！という気持ちでいっぱいになりました。ステージから降りて児童、先生一人ひとりと交わすハイタッチには力がこもっているようでした。「会えてよかったね。」の思いからでしょうか。そして、最後にたった一つ覚えた手話が、困った時や落ち込んだ時の私をも励ましてくれていきます。「大丈夫！」。(砂川校区 田中千賀子)